縄文文化を残そう

カラムシ栽培、「編布」に活用

原の牛山さんら有志 来年めどに「会」発足

縄文時代から繊維を取るために栽培され「編布（あん）」に使われていたとされるイラクサ科の多年草「カラムシ」。原村内外の有志でつくる「織り工房YOSHIMI」代表の牛山よしみさん（83）＝同村大久保＝を中心に会員やカラムシに興味のある住民らが、縄文の文化を残していきたい＝と、カラムシを栽培・活用し普及に取り組んでいる。活動に当たり有志らは来年をめどに会の発足を目指しており、一緒に活動する仲間を募っている。（町田陽）

育てたカラムシを収穫する住民たち

▶収穫したカラムシの皮を剥ぐ住民

カラムシは「苧麻（ちょま）」とも呼ばれ、茎の皮を剥ぎ、剥いだ皮の外皮を除いて繊維を取り出し、乾燥させた繊維を細く裂いてよりをかけて糸にする。国の重要無形文化財「越後上布」や「小千谷縮」（ともに新潟県）などの原料にもなっている。

長年機織りに取り組む牛山さんは、3、4年ほど前からカラムシを取り入れたいと思っていた。そうした中、カラムシの栽培などに取り組む、尖石縄文考古館（茅野市）のサークル「編布の会」の会員に偶然知り合いカラムシを畑で栽培できることを知り、2023年に同サークルの会員となり1年間栽培方法や繊維のより方などを学んだ。

井戸尻考古館（富士見町）から株分けをしてもらい、昨年から牛山さん宅近くの畑で栽培を開始。生育が良く、今年から本格的に収穫をし、皮や繊維を活用して各々で作品作りを行っている。

会では栽培から行い、活用方法を模索しながら織りに限らずさまざまな作品作りに取り組んでいく。「縄文文化が盛んな地域。遺跡だけでなく、こうした縄文の文化、いいものを原村にも残していきたい」と牛山さん。「興味のある人なら誰でも大歓迎。縄文文化を楽しむことを一緒にやりませんか」と呼び掛けている。

問い合わせは牛山さん（電話0266・79・2416）へ。